郷土史 ていね

第 138 号
令和 元年 6 月 12 日
手稲郷土史研究会 会報

［令和元年５月８日 定例会発表要旨］

手稲の発展と手稲中央小学校

札幌市立手稲中央小学校 元校長 赤 坂 登 夫 氏

① 昭和 46・47 年頃の札幌と手稲のようす

手稲町が札幌市のベッドタウンとなり、合併後の札幌市の人口は 100 万人を超えていました。手稲開基 100 周年、地下鉄南北線の開通、冬季オリンピック開催、札幌市の政令指定都市への移行など 変化の多い時期でした。小学校の数は 30 年位の間に 100 校も増え 210 校までになり、現在は児童数の減少により 200 校となりました。私が最初に勤務した伏見小学校は、108 番目の学校と聞いています。

② 手稲中央小学校について

手稲区には小学校が 16 校あり、そのほとんどが手稲中央小学校の子学校や孫学校にあたります。極論すると、手稲中央小学校の移り変わり[※1]が手稲の移り変わりを表しているといえます。※1 下図

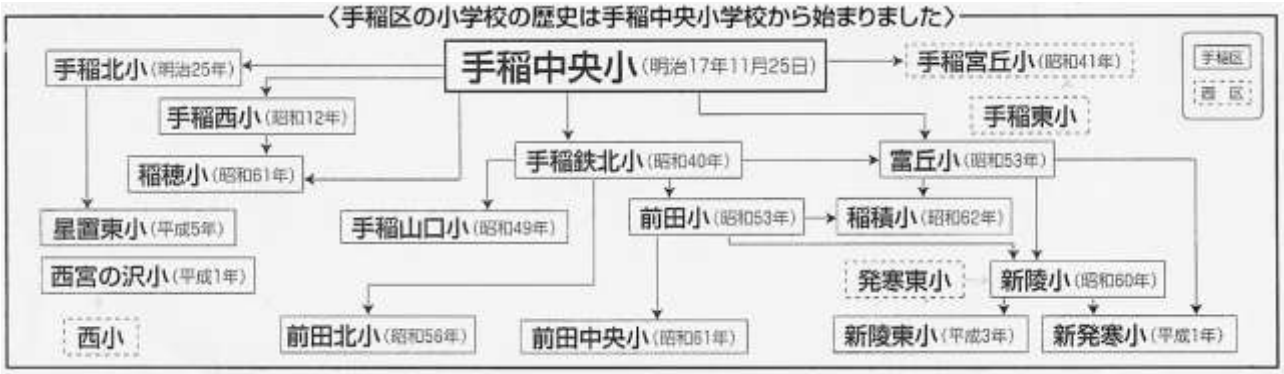
手稲中央小学校
校章

明治 17 年 11 月 25 日、手稲中央小学校は下手稲小学校として、手稲村大字下手稲村に開校しました。校舎は、開進社という会社の元事務所（現在の手稲本町 2 条 5 丁目）。児童数 15 人、先生は校長 1 人。学校の場所は新築や火災などで 4 回変わり、昭和 4 年に現在の場所になりました。下手稲小学校から始まり、軽川国民学校などを経て 8 回 学校名が変わり、札幌市立手稲中央小学校に至ります。

北国の象徴である雪の結晶と手稲山の雄姿を表す校章は、昭和 30 年 12 月 24 日に制定されました。これには、郷土を愛する温かい心と 強靭な意志を持って逞しく成長する子どもになる願いが込められています。

「香り豊かに 白き花 すずらん咲ける 学び舎の…」と、昭和 25 年制定の校歌の中に鈴蘭（スズラン）が歌われています。昭和 4 年の火災の後、校舎は新築できたが グランドは造れず、辺りに咲く鈴蘭[※2]を売って資金を貯め、何年もかけてグランドを整備しました。今、小学校の花壇に鈴蘭[※3] があるのは、鈴蘭を知らない子どもたちのために、私が植えたからです。※2 ニホンスズラン ※3 ドイツスズラン

校木の神樹（シンジュ）は生命力が強く、すくすく成長し、どんな環境の中でも逞しく育つ木です。手稲の子がこの木のように育ってほしいという願いを込めて選んでいます。昔、この木に鐘を吊るし、始業や終業の時に鳴らしていました。現在も鐘は「しんじゅの鐘」として大切に保存されています。



③ 手稲中央小学校の教育について

手稲中央小学校の年表を見ると、平成 17 年に 120 周年記念実践発表会（研究会）が行われ、その後、3 年ごとに研究会が実行されています。私の研究校での経験と私の強い信念に基づいて決めたことです。3 年に 1 回研究会を行うことは、意欲のある教師が集まりやすく、教師の力量が磨かれ、教育の質の向上につながります。つまり、手稲中央小学校の子どもたちにとって 良い環境ができるからです。若い大学生と接し、理解力と思考力の育成が小学生から大事と考え、校長の責任で読書の時間を設定しました。朝の 10 分間、全校児童が一斉に読書をするようにしたのです。このような経営の方針は「学校便り」で保護者や地域の方々に知らせてきました。

手稲山の豊かな自然、そして運動会での 3・4 年生による「花笠音頭」や 5・6 年生による「南中ソーラン」などに引き継がれた伝統は、手稲の地を離れた卒業生（同窓生）の心にも残っていくものと思います。

なお、平成 17 年には 富丘・西宮の沢・手稲中央の各小学校の校長が協力して編集を進めた 地域の歴史読本『富丘・西宮の沢時間旅行』が完成し、その後の総合学習の教材となっています。

④ 今後の教育への願い

教育予算を増やし、全ての子どもが安心して学べるようになってほしいと願っています。また、自主自学ができる教育制度の構築をすべきと、私は考えます。

次回予定 ⇒「手稲の交通史」田中和夫 氏（文筆家）／7 月 10 日（水）18:15～／手稲区民センター 3 階 視聴覚室

遺構･遺物は語る

サイロ

写真は、「前田公園」の一角に建つ 高さが5m ほどもあるレンガ造りのサイロ。旧前田農場の小作人だった 後藤さんという人が 自作農になったのちの 昭和 30（1955）年に建てたもので、公園のシンボルともなっている。

言うまでもなく サイロは牛や馬などの餌を入れるものだが、かつては、手稲ではあちらこちらに見られた。赤いサイロをバックに 牛たちがのどかに草を食む姿は、手稲はもちろん 北海道酪農を象徴する光景だった。

手稲で酪農が本格的に始められたのは、明治も 30（1897）年頃になってからだ。その先鞭を付けたのは、前田利家侯で有名な加賀藩第 15 代目の当主である 利嗣（としつぐ）侯が 明治 27（1894）年に茨戸にオープンさせた 前田農場で、29（1896）年には手稲に軽川支場が設けられた。これを契機として、稲積（いなづみ）農場、本間長助農場（曲長（かねちょう））、極東煉乳（きょくとうれんにゅう）（のちの明治牧場）、塩野谷（しおのや）牧場等の 大規模かつ先進的農場が 相次いで開かれていく。

その後、昭和戦後期になって、道庁の貸付牛制度等の施策により酪農に取り組む一般農家が急激に増え、ピーク時の昭和30（1955）年頃には、手稲だけでも 1,300 頭余りの牛が飼われていたという。サイロは、それなりの高さだったので、かなり遠くからでも見えたものだ。

都市化の進展等により酪農が衰退していくと、サイロだけが取り残された。しかし、それも最終的に取り壊され、レンガのほか、石造りやコンクリートブロック造りを含めても、今や 10 棟ほどしか残っていない。この「前田公園」のサイロも、酪農全盛期を偲ぶ貴重なものとなっている。

村元健治（手稲郷土史研究会 会員）

「前田公園」のサイロ

■■■分科会だより

手稲石の会「支笏湖巡検」パート 2

王子第一発電所の水溜横の桜

5月10日～11日、手稲郷土史研究会「手稲石の会」で、支笏湖を巡る研修旅行へ出かけました。これは、昨年10月に続き二回目となるものです。このたびの主な目的は、①王子第一発電所に咲いていると思われる桜の鑑賞、②私達の仲間であり“支笏湖学”の提唱者でもある手稲郷土史研究会会員の若松幹男さんが「環境大臣表彰」を受けられたお祝い（P.4参照）、③遊覧船で湖底の柱状節理を観察する、というもので、8人が参加しました。

【一日目】 まずは、昨秋も訪れた苔が美しい楓沢（かえでのさわ）へ。そして、王子第一発電所の桜は見事な満開で、私達を迎えてくれました。支笏湖ビジターセンターでは『北海道遺産＆土木遺産認定記念 支笏湖でつながる二つの遺産展』の“札幌軟石”と“山線鉄橋”の展示を見学。札幌軟石（支笏溶結凝灰岩（しこつようけつぎょうかいがん））の写真の多くは、主催団体にも所属する当研究会の菅原純子会員の撮影でした。その後は遊覧船に乗って湖底のようすを観察する予定でしたが、波が大きく中止になってしまい、残念。温泉街を散策して宿泊先のユースホステルに着き、ひと休みです。

夕食時は、いよいよ若松幹男さんの受賞を祝う会の始まりです。若松さんは私達の支笏湖先生！手作りの支笏湖・樽前山・恵庭岳・風不死岳を模した“冠”を頭に載せていただき、シャンパンで乾杯です。祝い酒は、先生持参の“越乃寒梅”。皆さん子供に帰った気持ちになり、笑顔でジンギスカンを囲みましたが話は尽きず、その後も部屋にて賑やかに談笑。親交を深めました。

【二日目】 樽前ガローに出発です。下方から場所を変えて3ヶ所、どの場所もその都度景色が変わり、変化に富んだ岩の割れ目に楓沢と同じように苔が生えています。ここは水が流れており、本当に見事な苔で、前日は「疲れてもう歩けない」と言っていた人も、真っ先に川のそばに下りて見とれてしまうほどでした。ガローとは、若松さんの資料によると、東北の方言で「切り立った崖の間を水量豊かな川が流れる場所」を意味するそうです。樽前山の噴火で堆積した柔らかい凝灰岩を水が浸食し、長い年月をかけてこのような景観が形成されました。そして、これからも変化し続けるのだとか。苔の群生地は川に沿って2kmにも及ぶそうで、確認された苔類は計87種とのことでした。

樽前ガローから支笏湖へ戻る途中に新しい道路建設現場があり、そこに4万年前からの地層が、くっきりと年代別に現れていました。このようにハッキリとした地層を見ることができて、興奮しました。道路ができる頃には整備され、きっと見られなくなってしまうでしょう。

新しい道路の建設現場

4万年前に噴火した支笏火山の火砕流堆積物（茶色の部分）の上に樽前火山の噴出物が層状（濃淡交互）に乗っている

次はいよいよ遊覧船ですが、またまた欠航です。午前中は運行していたのに、波が高くなり中止とのこと。湖底の柱状節理との出会いは、今回は縁がなかったのですね～。それとも、また来てくださいということでしょうか。

さて次は？ということになりましたが、支笏湖先生の頭の中には、いろいろな場所が詰まっているようです。そこで、恵庭岳の登山道入口付近の砂防ダムのところにある急斜面の地層を見ることに…。支笏湖巡検はここまでで終わりです。その後は、支笏湖が“生みの親”ともいえる札幌軟石の採掘場だった南区の「石山緑地」と石造りの「POST-O-KAN（ポスト・オ・カン）」（元石山郵便局）に寄り、帰路に着きました。

濱埜静子（手稲郷土史研究会 会員／手稲石の会メンバー）

■■■分科会だより　「銭函・花畔間運河」の痕跡を辿って…

新川通ー前田三線 間の運河跡

手稲郷土史研究会の「新川運河部会」では、新川につながる周辺の運河網についても 研究を進めているところですが、明治 30 年完成の「銭函・花畔(はんなぐろ)間運河」は、現在の国道 337 号線沿いに、その痕跡が見られます。「銭函運河」、「山口運河」、「花畔運河」とそれぞれ呼ばれ、とくに「山口運河」は毎年イベントが開催されるなど、地域でも親しまれています。

新川通と 337 号線が交差する辺りから 石狩寄りにも、500 m程にわたって 運河の跡が見られます。歩いてみると、確かに昔は舟が通っていただろうことが実感できます。この区間を「前田運河」と呼びたくなりました。

337 号線が 前田三線 と交わるところは また、札幌・小樽・石狩の三市の境界線にあたります。ここに三種類のカントリーサインを立て、旧運河（前田運河？）沿いを サイクリングやウォーキングコースとして整備できないか ──。歴史的に見ても 観光の面でも意義があるのではないかと、夢が膨らみました。

渡部孝次（手稲郷土史研究会 会員／新川運河部会 代表）

◆◆◆◆◆◆◆

手稲石の会「支笏湖巡検」での
若松幹男会員

★若松幹男 会員が環境大臣表彰　手稲郷土史研究会の若松幹男会員が、環境省による今年度の「『みどりの日』自然環境功労者環境大臣表彰」を受けました。おめでとうございます。表彰は、自然環境の保全・教育に顕著な功績のあった人や団体が対象となるもので、火山の形成史や土壌工学の専門家である 若松会員の、環境に関するこれまでの啓発活動や“支笏湖”をテーマとした教育研究活動などが 高く評価されました。「これからも遊びながら、支笏湖と付き合っていきたい」と語る若松会員。ますますのご活躍をお祈りします。

★沖田紘昭 会員が『北海道造林合資會社物語』を出版　明治期の急速な開拓により荒廃した手稲山の緑を再生し 北海道の林業に大きな影響を与えた企業が、かつて手稲にありました。その歴史と ゆかりの人々を描く**『手稲に咲いた明治の大輪 北海道造林合資会社物語』**を 手稲郷土史研究会の沖田紘昭会員が上梓しました。知られざる史料の発見と検証など、長年にわたり情熱を注いだ力作です。価格 2,500 円＋税。ご購入は、当研究会定例会でお申し込みになるか、沖田会員あて ご連絡をお願いします（電話 011-682-0755／E メール sapporo.okita@gmail.com ）。

★「手稲歴史資料展示コーナー」の展示替え　手稲区では「ふるさと手稲歴史発見事業」の一環として、手稲区役所 1 階の情報提供室に『手稲歴史資料展示コーナー』を設けています。6 月中旬からは、「手稲開基となった仙台藩白石城 片倉小十郎家臣団の入植」をテーマとした、手稲郷土史研究会の制作によるパネルを展示予定です。どうぞご覧ください。

★手稲郷土史研究会の刊行物について　手稲郷土史研究会から発行された図書のうち、5 月末現在で在庫があるものは、次のとおりです。●**史料に見る手稲今昔『手稲歴史年表』**（12 部／1,200 円）、●**東宮駐輦記碑移設記念誌『知られざる手稲と加賀百万石』**（15 部／1,000 円）、●**発足十周年記念誌『掘り伝える』**（30 部／1,200 円）、●**『手稲鉱山の思いを語る』**（98 部／1,000 円）。当研究会の資料部が窓口となって取り扱いますので、購入を希望される方は、定例会にてお申し出ください。